

瞬殺された断罪劇の後、

殿下、あなたを希望します

## ハロルド

クレイティル王国第二王子。  
訳あって、  
ローゼリアの婚約者探しに  
協力を申し出る。

## ローゼリア

マイスハント伯爵家令嬢。  
優秀だが  
感情が顔に出ないため、  
周囲に誤解されやすい。

## クライツ

ローゼリアの兄。  
皮肉屋で、  
よく妹をからかう。

## ルシアン

クライツの友人。  
ローゼリアの  
婚約者候補となるが……？

## フィオールド

第三王子にして、  
ローゼリアの元婚約者。  
思い込みが激しく、  
暴走しがち。

## アフエンドラ

クレイティル王国の王妃。  
ローゼリアを娘のように  
可愛がっている。

## シャーリー

フィオールドに好意を  
寄せられる男爵令嬢。  
努力家で、文官を志している。

## 第一章 瞬殺された断罪劇

「ローゼ、本当に一人で大丈夫なのか？」

珍しく心配そうな表情を向けてくる兄に、ローゼと呼ばれた少女は苦笑する。

「お兄様、いつからそんな過保護になられたのですか？ わたくしのことよりも本日は挨拶回りを優先なさってください」

「まったく……。可愛げのない妹だな。お前のことだから大丈夫だと思うが、なにかあればすぐに私を呼ぶように！」

「わかっております」

やけに聞き分けのよい妹に呆れ気味な様子で、彼は人だかりの中に消えていった。

今夜は隣国で功績を上げ、五年ぶりに帰国した第二王子の祝賀会だ。

この夜会で振る舞われている酒類は、全て彼女の家が用意したものである。当主である父はその手配で手が離せないため、代わりに兄クライツが挨拶回りを行っているのだった。

そして妹のローゼリア・マイスハントは、ある人物の姿を捜していた。

「殿下は一体、なにを考えていらっしゃるのかしら……」

呟いた言葉は、会場内の喧騒にかき消される。

彼女の婚約者は王族。このクレイティル王国の第三王子フィオルドだ。

そんな彼とは、六年前から関係がギクシャクしている。

婚約者として共にいるべき夜会だというのに、彼は迎えにも来なかったのだ。

二人の関係はこの一年でさらに悪化し、ローゼリアとの面会日にフィオルドが姿を現さない日もあった。

だが、今回のようにエスコートまですっぱかしたのは初めてである。

ローゼリアは苦悩するように眉間に手を添えた。

すると、グラスを手にした貴族たちの会話が耳に入ってくる。

「この芳醇な香り……マイスハント領産のワインかな？」

「さようございます」

「わたくし、このような飲みやすいワインは初めて口にしましたわ！」

「甘味も強く、酸味も少ない。今回はかなり熟成されたボトルが振る舞われているようだね」

「次は白もいただこうかしら？」

「かしこまりました。すぐにお持ちいたします」

配膳係が場を離れようとした瞬間、周囲がざわつきはじめた。

何事かと思い、ローゼリアは辺りを見渡す。

ざわめきの中心にいたのは、婚約者のフィオルドの姿だった。傍らには愛らしい令嬢を伴って

かたわ

いる。

彼女は第三王子のお気に入りと言われている、エマルジョン男爵家の令嬢シャーリーだ。

腰を抱かれた彼女はうつむき気味で固まっていた。

その状況を見て、ローゼリアは眉をひそめる。

その時、フィオルドの凜とした声が会場内に響き渡った。

「ローゼリア・マイスハント伯爵令嬢に告ぐ！ 私は本日をもって君との婚約を破棄する！」

王妃譲りの癖のある白金の髪に王譲りの濃いエメラルド色の瞳。

美しい容姿の婚約者は、繊細な王子という印象を抱かれやすい。

そんな彼が無駄に凜々しい様子で宣言した。

ローゼリアと同年齢であるフィオルドだが、真っ直ぐすぎる性格のせいかどこか子供っぽい。

自尊心は強いが自己肯定感が低いので、内面では色々と拗らせている。

今まで姿を現さなかったのは、この婚約破棄宣言を計画していたからなのだろう。

来場者たちは戸惑いの色を見せている。

さすがにこの展開にはローゼリアも驚いた。

しかしすぐに冷静さを取り戻し、落ち着いていた口調で婚約者に問いかける。

「殿下、理由を伺ってもよろしいでしょうか？」

婚約破棄を告げられても取り乱すことなく対応できるのは、ローゼリアがフィオルドに恋愛感情を抱いていないからだ。

それどころか『扱いに困る弟』という姉のような目線でしか彼を見ていない。フィオルドにとつても、自分より優秀な婚約者は目の上のたんこぶでしかないのだろう。そのことを物語るように、彼は今、別の令嬢を待らせている。

しかし傍ら<sup>かたわ</sup>の令嬢は、救いを求めるように淡い黄緑の瞳をローゼリアに向けた。そんな彼女の心情に気づくことなく、フィオルドが不敵な笑みを浮かべる。

「理由？ それは君の行動に問題があったからだ！ 君は今まで彼女に数々の嫌がらせを——」

フィオルドが朗々と語る中、ローゼリアの左側をなにかが駆け抜けた。

思わず振り返るが、そこには誰もいない。

しかし再びフィオルドに視線を戻すと、彼は黒髪の男性と対峙していた。

男性が素早い動きでフィオルドの右腕をシャーリーから振り払う。そしてそのまま彼女を庇<sup>かば</sup>うように、自身の背後へ引き寄せた。

見事な立ち回りを目の当たりにして、ローゼリアは言葉を失う。

フィオルドも不意をつかれたようで、動揺のあまり声を上げた。

「なっ……！」

一瞬の隙をつくように、男性は軽く腰を落とし、右肘を引きながら上半身を後方に捻った。

反動で男性の撫でつけられていた前髪がハラリと顔へこぼれ落ちる。

無駄のない一連の動作が、やけにゆっくりに見えた。

次の瞬間——

男性は、腰の入った拳をフィオルドの顔面に叩き込んだ。

衝撃で吹っ飛んだフィオルドが勢いよく壁に激突し、鈍い音が会場中に響き渡る。

突然の出来事にローゼリアだけでなく、救出されたシャーリーも啞然とした様子で固まっていた。容赦なく王族を殴りつけた男性に会場中の視線が集まり、気まずい空気が流れる。

そんな空気を一蹴するように、黒髪の男性が声を張り上げた。

「衛兵！ この大バカ者を地下牢へ連行しろ！」

怒声を上げたのは、この夜会の主役である第二王子のハロルドだ。

隣国に留学していた彼は線の細い兄や弟と違い、服の下に引き締まった体躯<sup>たいく</sup>を隠している。

しかも兄弟の中では一番背が高い。

彼の体重が乗った拳は、かなりの威力だったはずだ。

殴り飛ばされたフィオルドは白目を向いた状態で意識を飛ばしている。

駆けつけた衛兵たちが、激怒する第二王子に恐る恐る進言した。

「殿下、さすがに王子を地下牢に入れるなど……。せめて貴族用の監禁部屋にしてはいかががでしょうか」

「そのような配慮は必要ない！ さつさとこのバカを地下牢にブチ込んでおけ!!」

一喝された衛兵たちが意識のない第三王子を支えながら早々に会場を後にする。

彼らを見送って深く息を吐くと、ハロルドは背後に庇<sup>かば</sup>っていたシャーリーに向き直った。

「エマルジョン男爵令嬢……弟の身勝手な振る舞いに巻き込んでしまい、本当に申し訳ない。後日、



王家より正式に謝罪と償い<sup>つぐな</sup>をさせていただきたい」

「い、いえ！ わたくしこそフィオルド殿下をお止めすることができず、誠に申し訳ございません！」

「いや、これはあのバカ者の独断だ。あなたに非はない」

男爵令嬢を相手に深々と頭を下げる第二王子を見て、周囲は哑然<sup>さぜん</sup>としている。ローゼリアも茫然としながら、その様子を眺めていた。

次の瞬間、頭を上げたハロルドの視線が今度はローゼリアに向く。颯爽<sup>さつそう</sup>とした足取りで彼が近づいてくる。

「マイスハント伯爵令嬢。愚弟の非常識な発言で不快な思いをさせてしまい、本当に申し訳ない。危うくあなたの名誉が傷つけられる状況だったため、慌てて殴りつけたのだが……」

そう言って彼は先ほど弟が連行されていた会場の出口にチラリと視線を向けた。

「婚約破棄<sup>くわんぎ</sup>などというふざけた宣言を口にした時点で、あなたの名誉を傷つけたも同然だ」  
そして憔悴<sup>そうすい</sup>しきった様子で溜め息をつく。

「あなたが望むのであれば、全面的に王家の有責として婚約を破棄してください構わない。その際は私から出向かせていただきたいのだが、よろしいだろうか？」

非礼を詫びながら、第二王子ハロルドは青い瞳に力強い光を宿してローゼリアを見つめた。  
先ほどの大立ち回りで乱れた髪が瞳にかかり、絶妙な艶<sup>かほ</sup>つぽさを醸<sup>か</sup>し出している。

彼の強く美しい瞳から、ローゼリアは目が離せない。

それは彼女だけでなく、周囲の令嬢たちも同じだった。

しかしハロルドはまったく自覚していないようだ。無自覚に周囲を魅了する武闘派の第二王子は、夫を持つ貴婦人たちの視線すら釘づけにしている。

ローゼリアは、そんな魅惑的な雰囲気からいち早く我に返った。

「お気遣いいただき痛み入ります。ですが第二王子殿下にご足労いただくなど恐れ多いことでございます。話し合いには、わたくし共からお伺いいたします」

「いや。今回の件はどう考えてもこちらに非がある。謝罪の意味も込めて私から伺うべきだろう。その際、あなたによりよい縁談を提案したいと考えている」

再び王家が自分の婚約に関与するという提案を受けて、ローゼリアはわずかに身構えた。

「もちろん、断つてくださっても構わない。しかしこのような騒ぎになった以上、新たな婚約者探しには手を焼くだろう。もし迷惑でなければ、良いお相手に出会う機会の手助けをさせていただかないだろうか？」

まるで償いを切望するような口ぶりだった。ハロルドの誠実な態度を見て、警戒心がゆるんでいく。

「それではお言葉に甘え、殿下からのお心遣いがありがたく頂戴いたします」

「可能な限り、あなたにとつて最良の候補者をご紹介します」

申し出を受け入れた瞬間、第二王子が目を細めて笑みを浮かべる。

先ほどまで殺気立っていた人物とは思えない柔らかな表情を見て、ローゼリアは息をのんだ。

しかしその笑みはすぐに消え、代わりに凜とした表情を浮かべたハロルドは会場全体を見回した後、大きく息を吸い込んだ。

「騒がせてしまつてすまなかつた！ 愚弟のふざけた余興など気にせず、皆には引き続き、この夜会を楽しんでいただきたい！」

王子の言葉を合図にしたように楽団が演奏を再開し、会場全体の張り詰めた空気が徐々に和らいでいった。

「それではミスハント伯爵令嬢、また後日改めて謝罪に伺おう」

美しい礼を披露したハロルドは、クルリと方向を変えて颯爽と歩き出す。

その先では、国王夫妻と王太子夫妻がなんとも言えない微笑を浮かべていた。

この後、第三王子の処遇を話し合うのだろう。

そんなロイヤルファミリーの様子をローゼリアが眺めていると、いきなりポンと肩を叩かれる。

振り返ると、苦笑気味の兄クライツが立っていた。

「ローゼ、大丈夫だったか？」

「お兄様……。見ていらしたなら、すぐに助けていただきましたかったです」

「すまない。だが、あそこで私がしゃしゃり出てもあのバ……フィオールド殿下のお耳には届かなかっただろう」

「今、とても不敬に値する言葉を使おうとなさいましたね？」

「気のせいだ」

ごまかすように顔を背けた兄の視線の先には、なにやら神妙な顔つきで話し合う王族一家の姿があった。

その様子を見つめながらクライツが顎に手を当てる。

「それにしても帰国したばかりの第二王子殿下が、この騒動を収めてくれるとは思わなかったな」

「お兄様は、ハロルド殿下と面識があるのですか？」

「いや。ただ殿下は留学される十四歳まで王立アカデミーに通われていたので、学園内でお見かけしたことはある」

兄クライツは、ローゼリアより四つ年上の二十歳だ。現在十九歳の第二王子は、兄の一学年下の後輩として一年間ほど王立アカデミーに在籍していたことになる。

「アカデミー時代のハロルド殿下は、どのような印象でしたか？」

「そうだな……。いつも護衛騎士が共にいて、人を寄せつけない雰囲気を放っておられた」

兄の語る話が意外で、ローゼリアは驚く。

「先ほどのご対応からは、まったく想像がつきません」

「ああ。随分と雰囲気が変わられていたので私も驚いた。まあ、当時は殿下也多感な年頃だったからな。華やかなご兄弟に挟まれ、思うこともあったのだろう。お二人の煌びやかな容姿はアカデミーでも有名だった」

確かに当時十三歳だったハロルドのことは、社交界ではあまり話題になっていなかった。

王妃譲りのブラチナブロンドの髪を持つ兄と弟に比べ、国王譲りの黒髪ハロルドは周囲に地味

な印象を抱かせただろう。

「ですが、お三方とも大変お顔立ちが整っていらっしやいますよね」

「ああ。特にお前の元婚約者、フィオルド殿下は別格だ。ただ私は繊細なお顔立ちの第三王子殿下より、陛下譲りの凛々しい顔立ちをした上のお二人のほうが、男性として魅力的だと思うが」

「お兄様……。わたくしとフィオルド殿下の婚約は、まだ解消されておりませんか？」

「どうせ破棄するのだから『元婚約者』で問題ないだろう」

しれっとした様子で早々に第三王子を元婚約者扱いする兄に、ローゼリアが呆れる。

「ところで……フィオルド殿下はなぜエマルジョン男爵家の令嬢を伴っていたのだ？ お前は以前、彼女は王妃殿下主催の特別教育にも参加している、向上心のある令嬢だと言っていたが。あの様子では、どう見ても爵位の低い令嬢が第三王子を籠絡したかのよう——」

「それは誤解です！」

珍しく声を荒らげて言葉を遮った妹に、クライツが驚きの表情を浮かべる。

「どういうことだ？」

「シャーリー様は、殿下に特別な感情を抱いてなどおりません」

「なぜ言い切れる。お顔だけは整っているフィオルド殿下だ。年頃の令嬢であれば、多少は気持ちが揺れるのではないか？」

「彼女は女性文官の職を目指しているのです。特別教育への参加も王族と接する機会が多いことを考慮されてのこと。そんな努力を重ねる女性が恋にうつつを抜かすと思われませんか？」

ただでさえ難関と言われる文官職だ。女性文官ともなるとその門はさらに狭い。

シャーリーは夢を叶えるため、父親の領地経営を手伝いながら王妃主催の特別教育に参加し、空いた時間は王立図書館で試験の勉強に励んでいるのだ。

しかし兄は、妹の言い分に呆れた様子を見せる。

「それはわからないだろう。たとえ夢を追いかけていようと、人が恋に落ちるのは一瞬だぞ。大体……なぜ、努力家の令嬢が第三王子と噂を立てられるんだ？ 二人には接点がないだろう」

「それは……」

ローゼリアは口ごもる。

「シャーリー様には、王立薬学研究所で重要なポストに就くお姉様と、国内屈指のピアノリストになられた妹様がいらっしやいます。対してご自身は『これといった才能がないので恥ずかしい』と、こぼしているのを聞いたことがあります」

妹が語りだした男爵令嬢の家庭環境から、クライツはあることを察する。

「なるほど。才能溢れる姉妹に挟まれた彼女の境遇が、優秀な兄君たちと常に比較されるフィオルド殿下と似ているということか」

「シャーリー様もお姉様方と比べられ、苦勞をなさったのでしょうか。そのことを耳にした殿下は共感し、王立図書館に通い詰める彼女に自らお声をかけたようです」

「その上、彼女も自分に好意を抱いていると勘違いをなさったのか。彼女は空気の読めない第三王子に勉強を妨害されていたにすぎない、というわけだな」

クライツは、父親と共に宰相から今後の説明を受けているシャーリーに目を向けた。

ローゼリアも兄につられて視線を動かし、彼女の様子をうかがう。

深みのあるハニートロンドの髪と淡い黄緑色の瞳を持つシャーリーは、温かみを感じさせる愛らしい容姿だ。小動物を彷彿とさせる大きな瞳と小柄な体格は男性の庇護欲をかき立てる。

対してローゼリアの青銀髪と淡いターコイズブルーの瞳は、周囲に冷たい印象を与えやすい。身長も女性の平均よりやや高く、王子妃教育で身につけた姿勢が良すぎる立ち姿は、相手を萎縮させることもあった。

そんなローゼリアは周囲から『美しいが、まるで生気のない人形のように』と称される。

もともと感情が出にくかったのが、厳しい王子妃教育の結果、一層表情が乏しくなってしまったのだ。

しかも王妃や王太子妃のように常に笑みを浮かべる器用さを持ち合わせてはいない。

改めてシャーリーと自分が正反対だと感じ、ローゼリアは自分と同じ髪色の兄に目をやる。

「お兄様は、周囲から『冷たそうな人間』と称されたことはございますか？」

「なんだ、突然」

なんの脈絡もなく質問されたクライツが、怪訝な表情で問い返す。

兄は父親譲りの琥珀のような茶色い瞳をしているせいか、ローゼリアほど冷たい印象はない。

羨むようにその瞳を見つめると、クライツはなにかを察したように意地の悪い笑みを浮かべた。

「『クール』と称されることはあるが『冷たそうな人間』と言われたことはない。私はお前と違い、

感情が顔に出る。どこかのバカ王子のように人の表面しか見ない人間にとっては、わかりやすくて親しみを感じるのだろうな」

遠回しに『お前は無表情すぎる』と言われたローゼリアが、抗議の視線を兄に注ぐ。

彼女の表情の変化は、兄でなければ気づけないほど微かなものだ。

フィオルドの目には『なにを考えているかわからない人間』として映っていただろう。

そうして生まれた溝が本格的に問題になりはじめたのは、二人が十歳の頃である。

それまで同じペースで王族教育をこなしていた二人だが、内容が難しくなるにつれてフィオルドの手が止まるようになった。

同じ課題を解くにも、熟考するタイプのフィオルドは理解力が高いローゼリアの三倍は時間がかかる。

その度に、彼が理解できるまでローゼリアが待たされるといふ状況が続いた。

少年には無表情の婚約者の感情が読み取れず、そのせいで彼女に見下されているのではないかと疑念を抱きはじめてしまった。

同時に『自分は婚約者よりも劣っている』という認識を彼に植えつけた。

優秀な兄を二人も持つ少年は、兄たちだけでなく婚約者とも比較されるようになったのだ。

そんな彼を自分は無意識のうちに追い込んでいたのではないかと、ローゼリアはどうしても考えしてしまう。

すると、急に表情を曇らせた妹からなにかを察した兄が静かに呟く。

「言っておくが、今回の件はフィオルド殿下の弱さが原因で起こったことだぞ」

「ですが、もう少しわたくしが殿下に配慮をしながら接していれば、このようなことは起こらなかったのではないだろうか……」

「いや、無理だろう。お前は思春期の男の拗らせというものを甘く見すぎている」

同じく思春期である自分にそのようなことを口にする兄に、妹が苦笑する。

すると、クライツが再び意地の悪い笑みを浮かべた。

「そういえばあのバカ王子は、お前がエマルジョン男爵令嬢に嫌がらせを云々……と言いかけていたな？」

その問いにローゼリアは無言で目を逸らした。

「だが、彼女を評価しているお前が嫌がらせをするとは思えない。第三王子はなぜそのような誤解をした？」

兄の言及から逃れるように、妹は目だけでなく顔も背ける。

フィオルドが誤解したのは『第三王子と親しい男爵令嬢に婚約者の伯爵令嬢が嫉妬し、嫌がらせを行っている』という噂が一部の貴族子女たちの間で出回っていたという経緯があるからだ。

出所は王族の婚約者の座を狙う令嬢や、縁者を婚約者にしたい若い令息たちである。

そんな彼らは、第三王子の婚約者から彼女を引きずり下ろそうと画策をはじめた。

令息たちは王子がシャーリーに惹かれている状況を利用し、親しくなるように彼を煽った。

目的はローゼリアを婚約者の座から引きずり下ろし、自身の身内をその座につかせるためだ。

対して令嬢たちは、婚約者の不貞をしつかりと非難すべきだとローゼリアに訴えてきた。第三王子の不貞疑惑の噂を利用し、二人の関係をさらに悪化させようとしたのだ。

だが、ローゼリアは自分ではなく第三王子に直接訴えてほしいと彼女たちを適当にあしらった。すると彼女たちはターゲットをシャーリーに変更し、今度は彼女に嫌がらせをはじめた。そして、その犯人がローゼリアらしいと吹聴したのだ。

この予想外な状況にローゼリアは、すぐシャーリーに手助けを申し出た。

しかし意外と芯が強い彼女は「あのような愛らしい悪戯など嫌がらせのうちに入りませんので、ご心配なく!」と笑顔で返し、その後は自身で対処していたらしい。

どうやらお育ちのいい令嬢たちの思いつく嫌がらせは、彼女にとって可愛いものだったようだ。そんな経緯もあり、ローゼリアはこの状況にあまり危機感を抱けず、完全に放置していたのだ。その気まずさから目を逸らす妹にクライツが盛大に溜め息をつく。

「お前は……。悪評の鎮火を怠ったわけだな?」

「……………」

容赦のない兄の指摘に、ローゼリアは無言のまま頷く。

「まったく! 前言撤回だ。今回のフィオールド殿下の暴走はお前にも多少責任がある!」

「申し訳ございません……。ですがシャーリー様とは特別教育時にしっかり交流していたので、放置しても問題ないと思ったのです」

「その結果がこれだぞ。今回はお前も大いに反省すべきだな」

「はい……。おっしゃる通りです」

表情こそ変わらないが明らかにしゅんとした様子の妹に、クライツが苦笑する。

「まあ、これでお前がああバカ王子との婚約から解放されたのは、まさに僥倖だったが」

「お兄様、それは不敬にあたる発言ですよ?」

「王族の方々は第三王子の処遇を相談するのにお忙しいご様子だ。お耳に入らなければ不敬ではない」

「またそのような屁理屈を……」

「そういえば今後、第二王子殿下がお前の縁談相手をご紹介してくださるそうだな。どうせならそのハロルド殿下との縁組みを希望したらどうだ?」

「お兄様は本当に冗談が好きですね。もう王家との縁組みはお父様が敬遠されると思いますよ」

「いやいや、父上は喜ぶのではないかと? 貧弱で繊細なフィオールド殿下と違い、ハロルド殿下は武闘派だからな。留学中も剣術大会で何度も上位に入っていたそうぞ」

「まあ……それは確かに、お父様とはお話が合いそうですね」

「父上は剣術バカだからな。まあ、ひとまずはハロルド殿下に新たな婚約者候補をご紹介していただけ流れになりそうだが」

父親同様に騎士爵を持つクライツだが、それは剣術バカな父が息子に地獄の鍛錬を行ったからだ。その鍛錬は今でも行われている。

兄は自分よりも鍛え甲斐のある婿が妹のもとに来れば、そのしごきから解放されるとでも思っ

いるのだろう。

「お兄様。たとえ剣術の才に溢れた男性がわたくしの伴侶になったとしても、お父様の鍛錬からは逃れられないかと思えますよ？」

「お前は兄を労わるということを知らないのか」

抗議するような視線を向ける兄に妹は苦笑する。

だが、先ほどクライツが口にした冗談めいた提案が頭をぐるぐる回り、なぜか落ち着かない気持ちだった。

その理由がわからないまま、ローゼリアは不満そうな兄にエスコートを促すよう腕を絡めた。

## 第二章 第二王子と釣書

婚約破棄騒動から一週間後――

ローゼリアは父親から、無事に婚約が解消されたことを聞かされた。

もちろん全面的に王家の有責として、マイスハント家には多額の賠償金が支払われる。

縁談の提案についても改めて約束したそうだ。

「ローゼ。良い縁談相手の紹介はあったか？」

見合い相手の姿絵と釣書を眺めていたローゼリアは、部屋に入ってきた兄クライツに渋い顔を向ける。

「お兄様、妹の部屋に無断で入らないでください」

「なにを今さら。可愛い妹の伴侶のことなら、兄である私も気になるじゃないか」

「だからと言って、後ろからこっそり覗かないでください！」

「ほお？ ライデント伯爵家にクレイバース伯爵家……おお！ ミルツナイト侯爵家もあるじゃないか。ハロルド殿下は随分と有益な相手を紹介してくださるな」

「ええ。ですが、どちらも王都からかなり離れた西側に領地をお持ちです」

「なんだ、兄と離れるのが寂しいのか？」

「いえ。お母様と離れるのが寂しいのです」

「お前は……ただでさえ冷たく見られるというのに、そんな可愛げのないことを言うとは」

「同じような印象を抱かれやすいお兄様におっしゃる権利はないかと」

「言ったな！」

クライツに額を軽く弾かれて、ローゼリアがわざとらしく額をさする。

一見すると冷たい印象の二人だが、兄の場合はそれが『クールでミステリアス』と魅力的に作用する。

だが、人をからかうことを趣味とするクライツは、決してクールなどではない。

周囲から兄の容姿が褒められる度、ローゼリアは釈然としない気持ちになる。

すると、釣書を眺めていた兄が表情を曇らせた。

「確かに、この三家は遠すぎるな……。こちらの希望も添えて、新たな候補者を紹介してもらったらどうだ？」

「ですが、かなり厳選されたお相手のようですよ」

「すぐに決めてしまうのは賢くないぞ。伯爵家以上で未だに婚約者を持たず、お前とつり合う年齢の令息となると、そう多くはない。折角、王家のお力添えがあるのだから、じっくり吟味してもいいのではないか？」

「そう、ですよ」

ローゼリアと年齢的に見合う令息のほとんどは、すでに婚約者がいる。家柄、年齢、本人の評価

のどれもが申し分のない相手を探そうとすれば、王家でも困難を極めるはずだ。

そんな状況で今回紹介された令息たちは、かなりの高条件である。

しかし、当のローゼリアはなぜかその三人に魅力を感じない。

代わりに思い出すのが、弟を殴りつけたハロルドの勇姿だった。

颯爽と登場し、一瞬にしてシャーリーを弟から解放したかと思うと、しなやかな動きで力強い拳を放つ。

あの時の動きは美しい演舞のように、ローゼリアの記憶に深く刻み込まれていた。

なによりあの状況のシャーリーの立場が、羨ましくて仕方がない。

もしあの場所にいたのが自分であれば、彼の見事な動きを間近で見ることができたはずだ。そんなことを考えている自分に呆れていたら、兄がなにかを企むような笑みを向けてきた。

「王家はお前の貴重な時間を無駄にしたのだ。せいぜい無理難題を突きつけてやれ」

強気な兄の言葉を聞いて、ローゼリアは思わず噴き出した。



さらに一週間――

宣言通り、ハロルドが新たな婚約者候補の資料を持参してローゼリアのもとへやってきた。

どうやら彼は王家の一員として、弟の失態にかなり責任を感じているようだ。

父親と共に応接間に案内すると、彼は入室早々、深く頭を下げてきた。

「マイスハント伯爵、そしてローゼリア嬢。この度は愚弟の非常識な振る舞いで、大変不快な思いをさせてしまい誠に申し訳ない！」

「で、殿下！　どうかお顔をお上げください！」

父が慌てて訴えるが、それでもハロルドは頑として頭を下げるままだ。

「ハロルド殿下。わたくしは殿下のご対応に十分誠意を感じております。どうか、お顔をお上げくださいませ」

申し訳なさそうなローゼリアの一言で、やっとハロルドは顔を上げた。

「本当になんとお詫びを申し上げたいのか……。愚弟と婚約していたこの十年、あなたの貴重な時間を王族教育に費やされたというのに、それをこんなかたちで無駄にしました」

心苦しそうな彼を氣遣うようにローゼリアが言葉を返す。

「お氣になさらないでください。こちらでも貴重な教育を無償で受けることができたのですから」

「しかし……」

弟と違ってしっかり筋肉のついた体つきのハロルドは、一見細身に見えるほど背が高い。

そんな彼が罪悪感で縮こまるように肩をすくめている。

自分よりも圧倒的に大柄な彼が小さくなる様子に愛らしさを覚えたローゼリアは、慌ててこぼれかけた笑みを抑え込む。

そんな娘の反応に父親がわずかに笑みを深め、再びハロルドに向き直った。

「今回の件は、娘にもフィオールド殿下に寄り添えていなかったという落ち度がございます。殿下が責任を感じられる必要はございません。立ち話もなんですので、どうぞおかけください」

ハロルドは再び軽く頭を下げ、やっと長椅子に腰を下ろした。

目の前にいる彼は、どこから見ても立派な貴公子だ。

その彼が留学前は人を寄せつけない雰囲気だったという話を思い出したが、ローゼリアにはその状況がまったく想像できない。

そんなハロルドが側近から数冊の革のファイルを受け取る。

「本来であれば弟本人にも謝罪させるべきだが、父が『あのようなバカには謝罪の機会を与える価値もない』とかなり腹を立てて……。ローゼリア嬢にとっても愚弟との面会はご不快と思い、今後私も私に対応をさせていただければと思っている」

そう口にしなが、三冊のファイルを丁寧にテーブルの上に並べていく。

「だが後日、必ず本人からも謝罪をさせる。ひとまず婚約解消の賠償金については一週間前にご署名いただいた書面通り、今月中にお支払いをする予定だ」

ファイルを並べ切ると、彼は改めてローゼリアたちに向き直った。

「それから、縁談の件なのだが……。先日お渡しした釣書の中に、気になるお相手はいたのだろうか？」  
早々に本題に入ってきたハロルドに、娘ではなく父親が答える。

「どなたも素晴らしい方ばかりです。しかし領地が少々王都より離れすぎており、お話を進めるべきか決めかねております」

「ご息女の嫁ぎ先は王都に近い場所をご希望なのですか？」

「はい。娘には我が家が扱うワインの取引先開拓と、社交界に向けた特産品のアピールを任せたいと思っております。そのため嫁ぎ先には王都近くに領地を持つ方を、と考えております」

ハロルドが顎に手を当てて考え込む。

「なるほど。王都近くに領地を持つ貴族なら夜会を開く機会が多く、ワインの需要もあるというわけか。そこに嫁いだご息女が特産品を大々的に紹介すれば、新たな取引先を獲得しやすいと。どうやら伯爵は、なかなかの商魂をお持ちのようだな」

「いえ。実はこの件は娘が言い出したことでした」

その返しを受けて、ハロルドは意外そうな表情を浮かべてローゼリアを見やる。

「ご息女が？」

マイスハント家にとって上客となるのは、夜会を頻繁に開く中央貴族たちだ。彼らの社交を通して流行が生まれ、国内の物流が活性化する。

逆に地方の貴族たちは社交よりも国防を重視し、夜会を開くことはあまりない。

近隣諸国への輸出ルートはローゼリアがフィオールドと婚約した際、王家の伝手で確立済みだった。今後マイスハント家が狙う客層は、まだ契約を交わしていない中央貴族たちである。

そう考えたローゼリアは、王都近くに領地を持つ相手に嫁ぐことを希望した。

そのほうがワインの大口顧客確保に繋がるからだ。父と兄も賛成してくれている。

だがハロルドには、発案者が十六歳の少女だったことが意外だったのだろう。驚いた表情のまま、

ジツと彼女を見つめている。

ローゼリアが気まずそうに微笑むと、彼はフツと息を吐いて柔らかな笑みを浮かべた。

「なるほど。立派な商魂をお持ちなのはご息女のほうだったか」

あまりにも魅惑的な表情を見せた王子にローゼリアの興味は全て持っていられる。

だが、その笑みは彼がテーブル上のファイルに目を落としたことで消えてしまった。

「そうすると今回も、あまり期待には添えない可能性がある……」

彼はそう呟くと、先ほど並べた釣書を手で示す。

新たに提案された三名の候補者は二十代前半、ローゼリアとも無理のない年齢差だ。

だが領地は王都から遠い。しかも、全員子爵家の令息だった。

「あの、殿下……」

気まずそうに声を上げた父親の態度になにかを察したハロルドは、悪戯が成功したような笑みを  
見せた。

「爵位のことであれば心配は無用だ。実は三家とも近日中に昇格が予定されている」

「な、なんと！」

「この情報はまだ極秘なので内密に。野心溢れる令嬢の目に留まっては困るのでな」  
そう言って人差し指を立て、そっと口元に当てる。

どうやらこの第二王子は、意外と策士でもあるらしい。

ローゼリアの心が、またしてもざわついた。

困ったことに彼女の興味は提案される候補者よりも、ハロルド自身へ向かってしまうのだ。そんな娘の心境を知らない父は、新たな候補者たちの情報をじっくりと確認している。

「ローゼ。気になる方はいるかい？」

急に話を振られて、ローゼリアは近くに置かれた釣書に目を落とす。しかし、情報がまったく頭に入っていない。

「ええと、その……」

何度も内容を読み取ろうとしても、つい目が滑ってしまう。

「申し訳ございません、しよ、少々お待ちを……」

「いや、すぐに判断できることではないだろう。お父上と慎重に検討してほしい」

麗しい微笑みを惜しみなく披露する第二王子は、出された紅茶をやっと口にした。

王族だけあって、紅茶を嗜む所作一つとっても大変美しい。

とてもではないが、弟を殴り飛ばした人物とは思えないほどの優美さである。

その光景にまたしても見入ってしまったローゼリアは、再び声をかけられたことで我に返った。

「ローゼリア嬢」

「は、はい」

「今回提案した候補者たちでは、おそらく希望に添えないところが多いと思う。二週間後、改めて出直したいのだが、ご予定はいかがだろうか」

その申し出を聞き、ローゼリアはさらに慌てふためいた。

「い、いえ！ 殿下に何度もご足労いただくなど恐れ多いことでございます。次回はわたくしから伺いたく存じます」

「だが今回はこちらに非があることだ。私が出向くべきだろう」

「その件につきましては、すでに誠意あるご対応をいただいております。なにより王族の方を何度と呼びつけては、我がマイスハント家の醜聞にも繋ぎます。次回はこちらから伺わせてくださいませ」

やっと平常心を取り戻したローゼリアは、いつもの澄ました顔に戻る。

その様子を目にしたハロルドが笑いを堪えるように片手で隠した。その反応にローゼリアは首をかしげる。

「……了解した。では二週間後、改めてお声がけしよう。その際にあなたが登城可能な日程を確認させていただく」

そう言ってハロルドはスツと立ち上がった。

「謝罪する立場で長居するわけにはいかないので、私はこの辺で失礼させていただきます。今回は候補者の中でも、もし気になる人物がいれば遠慮なく言ってほしい」

彼は側近に目配せをし、部屋の出口へ向かう。

そんな第二王子を見送るため、親子もその後が続いた。



ハロルドがマイスハント邸に来訪してから二週間。

再び縁談の件で声がかかり、ローゼリアは父ではなく兄クライツと共に登城した。

しかしハロルドの公務が押しており、二人はしばらく待たされることになった。

「それにしても、なぜお兄様が同行を？」

「父上では、お前の希望を聞き入れすぎるからな。私なら私情を挟まず公平な視点でアドバイスを  
してやれる。どうだ？ 心強いだろう」

「お兄様好みのお相手を見繕われそうで不安しかありません」

「お前は本当に可愛げのない妹だな……」

妹の切り返しに呆れ気味の兄だが、その眼差しは優しい。

十年という婚約期間をふいにされた妹の状況にさすがの兄も同情しているのだろう。

そもそもクライツも父親ほどではないが、妹に甘い。

先ほどの理由も建前で、実際のところは妹のことが心配だけである。

近頃やけに過保護になった兄に対し、ついローゼリアの口元がゆるんだ。

すると、クライツはなんともバツが悪そうに顔をしかめる。

「お前のその察しの良さも、場合によっては考えものだな」

「過保護すぎるお兄様にも原因があるかと思えますよ」

そんな会話をしていると扉がノックされ、王妃付きの侍女が入室してくる。

「失礼致します。お待たせしてしまい大変申し訳ございません。実はハロルド殿下のご公務が長引  
くとのこと……。その間、王妃殿下がローゼリア様をおもてなしされたいと、お茶席への案内を  
言付かってまいりました」

「王妃殿下が？」

「はい。それからクライツ様とは、リカルド殿下がお話しをされたいとのことでした」

兄が意地の悪い笑みを浮かべる。

「なるほど。今度は王太子殿下より謝罪のお言葉がいただけるようだ」

「お兄様！」

「いいではないか。王家が我々マイスハント家にした仕打ちを思えば、この程度の不敬くらい許さ  
れるはずだ」

兄の態度に呆れながら、ローゼリアは侍女に向き直る。

「わかりました。そのお誘い、お受けいたします」

「恐れ入ります。ではお部屋にご案内させていただきます」

ローゼリアが部屋を出ようとすると、クライツがにやりと笑みを浮かべて言った。

「ローゼ、あまり王妃殿下を責めるなよ？」

「わたくしはお兄様と違って、そのような無礼はいたしません！」

「最近のお前は一言多いな」

「お兄様だけには言われたくないです」

やや反抗的な態度の妹にクライツは片手をヒラヒラさせて退出を促した。

そんな兄を尻目に、ローゼリアは侍女に連れられて足早に王妃のもとへ向かった。

だが、そこでふと疑問を感じた。

有能なハロルドが、面会を予定していた日に公務に追われているというのは、妙な話だ。

彼の性格であれば、急ぎの公務は事前に終わらせているのでは、と考えたのだ。

そのことが気になり、侍女に軽く確認してみる。

「ハロルド殿下は、そんなにご公務が立て込んでいらっしゃるの？」

すると侍女が、やや困惑した笑みを返してくる。

「そういうわけではないのですが……。先ほど、急遽処理しなければならない書類手続きが発生してしまったそうです」

「そう。急なことだったのね……」

しかし、そう答えながらローゼリアは気づいた。

その突発的な公務を入れたのはおそらく、王妃殿下なのであろう、と。

王妃アフエンドラは見た目が大変若々しく、おっとりした女性だ。

その反面、したたかで計算高い一面も併せ持つ。

彼女が主催する若い令嬢向けの特別教育は、そのいい例と言えるだろう。

結婚当初から娘を熱望していたアフエンドラだが、生まれたのは息子ばかりだった。

そこで長男に早々に婚約者を決めさせ、その人脈作りと称してはじめたのが『王妃主催の特別教育』である。

当時まだ息子の婚約者だった王太子妃マリアローズや、その同年代の令嬢たちとの特別教育を通し、彼女は『娘との楽しい交流』をちゃっかり疑似体験していたのだ。

そんな動機ではじまった特別教育だが、優秀な令嬢たちにとっては同レベルの令嬢と出会える大変ありがたいコミュニティだった。

実際にここでの交流があったおかげでローゼリアは噂話に踊らされることなく、婚約破棄騒動でも冷静な態度でいられたのだ。

だが、第二王子との婚約を解消した今、ローゼリアが特別教育に参加する必要はない。

そのことを懸念した王妃は、次男を押しつけてでも彼女に会いたかったのだろう。

王妃にとって彼女は、義理の娘になる予定だった特別な存在だ。

そのローゼリアと交流の機会が減ることに未練を感じてしまうのも無理はない。

急に仕事を回されたハロルドは災難だったろうが、王妃が未だに自分を慕ってくれていることを感じ、ローゼリアの胸に温かいものが込み上げる。

侍女に案内されて、豪華な扉の前まで辿りつく。

入室を促され、ローゼリアはゆっくりと部屋の中に足を踏み入れた。

そこにいたのは、予想外の人物だった。

「シャーリー……様？」

呆然としながら声をかけると、彼女は軽くうつむいた。

だが、すぐになにかを決意したように勢いよく顔を上げる。

「ローゼリア様！ 先日は、わたくしの至らなさでご不快な思いをさせてしまい、誠に申し訳ございませんでした！」

入室早々に深々と頭を下げられたローゼリアが慌てて彼女を宥めた。

「お、お顔を上げてください！ シャーリー様の立場ではどうしようもなかったことは理解しております。むしろ穏便に場を収めることができなかったわたくしこそ、謝罪をしなければなりませんの……」

男爵家の生まれである彼女が、王族のフィオルドに物申すことなどできるはずもない。

それでも自身でなんとかしなければと、あの騒動の中もずっと葛藤していたのだろう。

事態が収束した今となっても、なにもできなかったことに彼女が責任を感じているのだと痛いほど伝わってくる。

それはローゼリアも同じだった。

早々に婚約者の暴走を止められなかったのは自分の責任だ、と深く後悔していたのだ。

静観していた王妃アフエンドラは、苦笑を浮かべながら二人の間に入る。

「もう、そのように自分たちを責めないで。悪いのは全てわたくしの息子のフィオルドです。二人が責任を感じる必要はないのよ？」

「ですが」

「ですが……！」

まるで示し合わせたかのように同時に返答する二人を見てアフエンドラが苦笑を深める。

「シャーリー嬢。息子のせいで恐ろしい思いをさせてしまつて、本当にごめんなさい……」

「お、王妃殿下！ わたくしのような者に頭を下げる必要などございません！」

「ローゼリア嬢。あなたには今回のことだけでなく、これまで長い時間を王妃教育に費やしてくれていたのに大変申し訳ないことを……」

「いいえ。わたくしにも落ち度がございました。どうかお気になさらないでくださいませ」

王妃に深々と頭を下げられてシャーリーは慌てたが、ローゼリアは敬意を払いつつ冷静に対応する。

それぞれ違う反応を見せる二人を見て、アフエンドラは嘆息した。

「本当にあなた方は素晴らしい令嬢だわ。それに比べて、フィオは……」

思わず王妃がこぼした言葉に、第三王子の性格をよく知るローゼリアは苦笑するしかない。

しかし、シャーリーは深刻そうな表情を浮かべていた。

その様子に引っかかりを感じていると、王妃が再び口を開く。

「ローゼリア嬢、あなたをお呼びしたのは、息子のことでお話ししたいことがあったからなの」

シャーリーだけでなく王妃にまで真剣な表情を向けられて、ローゼリアは思わず身構える。

もしやフィオルドが婚約解消に異議を唱えだしたのでは……そんな不安が脳裏をよぎった。

公の場で婚約破棄宣言をやらかしたフィオルドだが、兄に殴り飛ばされたお陰で婚約者を冤罪で侮辱しようとした件は未遂扱いになり、辛うじて王籍から抜かれずに済んでいる。

しかし国王の怒りは深く、現在はフィオルドの叔父にあたるエレムルス侯爵配下の屈強な騎士団に交じり、過酷な鍛錬を受けているそうだ。

甘やかされて育った第三王子のことをよく知るローゼリアは、わずかだが彼に対して同情を覚えた。

だがそれも、続く王妃の言葉によつて見事に消し飛んだ。

「まず一つ目なのだけれど……実はフィオが未だにシャーリー嬢を諦めきれずにいるの」

ローゼリアはボカンと口を開け、慌てて扇子で口元を隠す。

そして勢よくシャーリーに視線を向けると、彼女は気まずそうにうつむいた。

「王妃殿下、その……どういうことでしょいか？」

茫然としながらも尋ねたローゼリアに、王妃が深い溜め息をついて答える。

「今フィオが、エレムルス侯爵邸で再教育を受けていることはご存じかしら？」

「はい。兄がそのようなことを申ししたので……」

兄クライツの話では、フィオルドの性根を叩き直させるべく、国王が自らの弟に矯正を託したとのことだった。

「陛下はフィオルドにかなりご立腹で……。あの子が成人するまでの二年間は、侯爵のもとで徹底的に精神の未熟さを克服させるおつもりなの」

王弟が治めるエレムルス侯爵領は国内北部の三分の二を占める。北の大国と東の隣国にも隣接しているため、守りを固めなければならない場所だ。

特に北の大国側との国境付近では、山賊等の被害に加えて密輸や人身売買までが横行する。

それらを取り締まるエレムルス騎士団は国内最強とも言われていた。

そんな危険と隣り合わせの場所に息子を放り込むということは、国王もそれだけ本気なのだろう。しかし、そんな国王の予想を遥かに超える動きをフィオルドは見せているらしい。

「でもあの子は変なところで打たれ強いでしょう？ 今回も予想外の方角に努力をはじめたというか、暴走しはじめたというか……」

王妃はなかなか本題に入らない。

ローゼリアは答えを求めるように、シャーリーへ視線を向けた。

「……実はあの後から、わたくしのもとにフィオルド殿下から毎週分厚いお手紙が届くようになったのです」

シャーリーが語る話を聞いて、ローゼリアは哑然とする。

フィオルドは迷惑をかけた相手に長文の手紙を送りつけ、あまつさえ関係の醸成を図ろうとしているというのだ。

そんな彼の図太さに驚き、王妃のほうにそつと視線を向ける。

するとアフエンドラは気まずそうに口を開きはじめた。

りの過酷さに休日死んだように眠って過ごすと言われてるわ。でもフィオは……」

そこで一度、言葉を詰まらせる。

「そんな過酷な日々の合間でも想い人に分厚い手紙を書く余力が、なぜかあの子にはあるのよ……」

王妃はうなだれて、眉間を手で押さえた。

「どうしてあの子は、無駄な方向ばかりに努力をしてしまうのかしら……」

彼女の嘆きから、共に王族教育を受けていた頃のフィオルドの様子をローゼリアは思い出す。

優秀な兄たちに比べて、フィオルドは平凡な少年だった。

そんな彼にも、たった一つだけ兄たちに負けない天賦<sup>てんぷ</sup>の才があった。

それが、これと決めたことに対する粘り強さである。

フィオルドは自分にもできると思ったことに対しては、どこまでも努力ができるのだ。

現に、大苦戦した王族教育も結果的にはしっかりと学びきっている。

彼には『兄たちにはできることは弟の自分にもできる』という謎の持論があり、その思い込みによって兄たちと同じように王族教育を成人前に修めたのだ。

並々ならぬ努力を継続できること。それはフィオルドが持つ素晴らしい才能だ。

しかしその才能が、今はとんでもない方向に作用しているらしい。

「王妃殿下。フィオルド殿下の諦めない心と努力を継続できる忍耐力は、とても素晴らしい美徳だと、わたくしは思います」

「そうね……。そのことは、わたくしも理解しているつもりよ。でもね？ その努力を向けるのが

『誰かとの関係醸成』だった場合は話が別なの……。ローゼリア嬢、このことを踏まえて、シャーリー嬢の今後についてどう思うかしら？」

ローゼリアは、ゆっくりとシャーリーに視線を向ける。

「フィオルド殿下のことですから、受け入れてもらえるまでシャーリー様へお手紙を続けるでしょう。早々に対策をとられたほうがよろしいかと存じます」

その意見に同意するかのように王妃が両手で顔を覆う。

「そうよね。わたくしもそう思うわ。このままではシャーリー嬢の貴重な時間が息子のせいで潰されてしまう……。フィオの手紙を止めさせるよう、わたくしからエレムルス侯爵に頼んでおきます！ シャーリー嬢、申し訳ないのだけれど一度だけ、勉学を理由に返信できないという趣旨の返事をあの子にしていただけ。そうすれば言い訳が立つと思うから」

「かしこまりました。王妃殿下、ご対応いただき、心より感謝申し上げます」

「お礼なんて言わないで……。またこちらが迷惑をかけてしまっているのだから」

そう言って王妃は困りきったように微笑を浮かべる。

フィオルドが簡単に諦めないことは予想していた。しかし、まさか過酷な鍛錬で有名な騎士団に放り込まれてもアブローチを行っていたとは、さすがのローゼリアも予想外だった。

おそらく彼は『他の騎士たちが平然と休日を過ごしているのだから自分も平気なはずだ』という思い込みだけで、その状況を乗り切っているのだろう。

精神的には脆い<sup>もろ</sup>フィオルドだが、この自己暗示ともいえる強固な思い込み癖は、彼にとって本来

は不可能なことをなぜか可能にしてみよう。

その根本には彼の極端に走りやすい思考と、一途な性格が関係しているのだろう。

ある意味、兄たちよりもすごい才能なのだが、状況によつては今回のように恐ろしい脅威となる。今後シャーリーへの執着ぶりが悪化してしまうのではないかと、ローゼリアは懸念した。

だが、彼女も他人の心配をしている場合ではないことを王妃から告げられる。

「ローゼリア嬢。実はもう一つ、あなたに関してもお伝えしなければならぬことがあるの……」

その前置きを聞き、ローゼリアはビクリと肩をこわばらせる。

「あの子、ローゼリア嬢の件でも変なことを言いだしたのよ……」

「わたくしの件でございますか？」

「実はあの騒動の後、ハル……ハロルドが四時間にも及ぶお説教をフィオにしたの。そこでやっとあなたがシャーリー嬢に嫌がらせをしていたという話が偽りだったと理解はしたのだけれど……」

そこでまたしても王妃は言葉を濁す。

「そうしたらあの子、今度はあなたの悪評を吹聴していた令嬢たちの身元を調べはじめたのよ。それで彼女たちと共にあなたへ謝罪に行くと言いついて……」

ローゼリアは愕然とした。フィオルドは仮にも王子なのだ。いかに令嬢たちが蒔いた種であったとしても、王族が貴族に謝罪をさせるとなれば、強要したも同然となる。

それではミスハント家と謝罪した側の家の間で波風が立つに決まっている。

「ミスハント伯爵家には多大な迷惑をかけるし、再び陛下の逆鱗に触れてしまうわ。でも、ほ

ら……あの子、一度言い出したら聞かない性格でしょう？」

そう話す王妃の表情は呆れを通り越して、今にも泣き出しそうな半笑い状態である。

「今エレムルス侯爵邸では、毎週一回の貴重な休暇日にあなたのもとへ向かうするフィオと、それを阻止しようとする王家の影との激しい攻防が繰り広げられているわ……」

力なく語る王妃に令嬢二人は、もはや同情の念を抱かずにはいられない。

フィオルドの『目的を達成するまで努力を続ける不屈の精神』は、一步間違えると『しつこすぎて大迷惑な人間』になり下がる。

シャーリーの件では、彼女が振り向くまで過剰アプローチをやめないという展開になり、ローゼリアの件では、悪評を吹聴した令嬢が全員謝罪するまでこだわり続けるということだ。

もしそんなことをされたら、ミスハント家が王家の権力を笠に着てのし上がろうとしている、と噂を立てられかねない。

頭が痛くなる想像をしてしまったローゼリアは、同じ心境の王妃に憐憫の眼差しを向けた。すると、王妃が今日一番の深い溜め息をつく。

「あの子は、どうしてあんなにも極端な思考をしてしまうのかしら……」

ローゼリアも深く同意した。

彼の勢いだけで突っ走ってしまうところは、どことなく兄のハロルドにも通ずるものがある。ただハロルドの場合は状況把握能力が尋常でないの、結果が違ふ。

フィオルドのように後先考えずに突発的に行動しているわけではないのだ。

ローゼリアの悪評を吹聴<sup>ふいごう</sup>していた犯人探しに関しても、フィオルドは過ちを正すことにこだわりすぎて、その行動が後にどんな事態を招くかまで考えが回っていない。

王妃もそのことを理解しているので、三男にはどうしても厳しめな言葉が出てしまう。

「だからね。もしあの子がマイスハント家に突撃するようなことがあれば、遠慮なく追いついて構わないわ！　むしろ、可能であれば、その場で捕縛して王家に突き出してほしいの！」

もはや王族に対する扱いではない、とローゼリアは引きつった笑みを浮かべた。

シャーリーに至っては思わず噴き出しかけ、慌てて口元を手で覆っている。

そんな彼女だが、今回の騒動でローゼリア以上にひどい風評被害を受けている可能性がある。

あの状況によって、第三王子が男爵家の令嬢に簞絡<sup>さうらく</sup>されたという印象を周囲に抱かせてしまったからだ。

現に、ローゼリアの兄クライツもそのような誤解をしかけていた。

急にそのことが気になって、ローゼリアは探りをかけてみることにした。

「あの……シャーリー様。つかぬことを伺いますが、あの騒動後でお困りになっていることなどはございませんか？」

突然の質問を受けた彼女はきよとした後、ニツコリと笑みを浮かべた。

「いえ。あの後、会場の皆様には陛下からしつかり説明がございましたので、問題になるような誤解は受けておりません。ローゼリア様もお氣遣いいただき、ありがとうございます」

どうやら余計な心配だったらしい。

お礼までされて、こそばゆい気持ちになったローゼリアは恥ずかしげにうつむく。

そんな二人の様子をニコニコと眺めていた王妃が、再び口を開いた。

「シャーリー嬢には今回のことの償い<sup>つぐな</sup>として、かねてから彼女が希望していた女性文官の職をご用意させていただいたの」

「えっ？」

「もちろん採用に至るには今年度の文官試験で合格するという条件つきにはなるけれど、彼女用に女性文官採用枠を一人分多めに確保することになっているわ」

その王妃からの朗報にローゼリアの冷たい瞳が珍しく輝きだした。

「ではシャーリー様は、ついに念願の女性文官に!？」

普段は冷静沈着な伯爵令嬢の興奮した様子を見て、シャーリーが驚きの表情を浮かべる。

「ローゼリア様？　なぜわたくしが文官職を目指していることを？」

彼女の質問で我に返ったローゼリアは、慌てて扇子で口元を隠す。

「その……以前お茶会で熱心にお話しをされていたので……」

「まあ。そのような個人的なことまで覚えていただけたのですね。とても嬉しいです！」

愛らしい反応を見せる彼女に、ローゼリアは思わずときめいた。

彼女とは、もっと親しい友人になれたら——と、そんな思いが胸に込み上げる。

そうして話をしていると、突如力強いノック音が室内に響き渡った。

「あら、わたくしが嫌なタイミングで仕事を回したことにハルが気づいてしまったようね……」

王妃の予想通り、扉が開かれると同時にハロルドが勢いよく室内に入ってくる。  
「母上、どういふことですか？ 本日ローゼリア嬢は、私との話し合いのために登城されたはずですが」

珍しく不満をぶつけてくる次男に、アフエンドラがすまなそうに眉尻を下げる。

「ごめんなさいね。フィオの暴走のことをローゼリア嬢にもお伝えしておきたかったの」

「あのようなバカは放っておけばよいのです！ 母上であつても、これ以上彼女を煩<sup>わづら</sup>わせるようなことはやめていただきたい」

「そんなつもりはなかったわ。でもね、フィオも今は間違いに気づいて猛反省しているでしょう？ だから、せめてそのことだけでも彼女にお伝えしたかったの」

「母上……ああいうバカは死んでも直りませんよ」

容赦なく弟をこき下ろす次男に対して、さすがの母も三男に同情の念を抱きはじめたらしい。

「ハル。あなた、お兄様でしょう？ もう少し弟をいたわってあげられないの？」

「無理ですね。あのバカは今年で十七です。もう子供ではないんですから、母上も奴を分別ある大人として扱うべきでしょう」

「そのつもりなのだけれど、フィオの行動があまりにも突飛すぎて……。あなただってあの子の扱いが難しいことは、よくわかっているでしょう？」

「やはり一度、私が奴の性根を叩き直さないとダメなようですね」

ハロルドが両手の指をボキボキと鳴らしはじめる。

「あまり余計なことはしないでちょうだいね。またフィオが変な方向へ解釈したら、ますます暴走してしまふから」

「まったく！ 弟とはいえ、なんて面倒な性格なのだ！」

珍しく悪態をつくハロルドだが、この部屋に母以外の女性が二人いることを思い出し、軽く咳払いをした。

「……見苦しいところを見せてしまい大変失礼した。母上、そろそろローゼリア嬢を私にお返しただけませんか？」

「そういえば、彼女に新たな婚約者を紹介していたわね。ローゼリア嬢、どなたか気になる殿方はいらしたかしら？」

「いえ、その……」

急に話題を振られたローゼリアは口ごもりながら、思わずハロルドに視線を向ける。

自分の行動に、ローゼリア自身驚いていた。

だが、周囲は彼女の小さな反応に誰も気づいていないようだ。

「母上、そう簡単に良縁が得られたら世の女性は苦労しないでしょう。ましてやローゼリア嬢のような素晴らしい淑女ともなると、平凡な男性ではつり合いがとれません」

「ふふっ、確かにその通りね！ でもわたくし、そんな彼女に自信を持つてご紹介できる候補者に一人だけ心当たりがあるのだけれど」

思わせぶりに微笑む王妃の顔を見て、ローゼリアは密かにうろたえる。

どうやら王妃は、彼女がハロルドに惹かれつつあることに気づいたようだ。

一方のハロルドは母親から申し出をバチリと断った。

「せっかくのお話ですが、まずは私が厳選した人物をご紹介します。もしそれでも良いお相手がいなくなったら、改めてご相談いたします」

「まあ！ わたくしの提案は最後まで後回しということ？」

「そういうことになりますね。この件で責任をとりたいと申し出たのは私ですから、ここは一任しただきたい」

「わかったわ。でも、これ以上見つからないとなったら、すぐにわたくしを頼りなさいね」

「もちろん。その時はぜひ、母上のお知恵をお貸しください」

それからハロルドはゆつくりとローゼリアの目の前までやってくる。

「ローゼリア嬢、お待たせしてしまい申し訳ない」

丁寧な謝罪の言葉を口にした彼だが、チラリと母親へ抗議の視線を送る。

だがアフエンドラは、その視線を無視するようにシャーリーへ紅茶を勧めていた。

そんな母の態度に第二王子が苦笑する。

「ここは母上の独壇場だな。ローゼリア嬢、申し訳ないが場所を変えても？」

「は、はい。もちろん」

「では、お手を」

スツと差し出された手をローゼリアが遠慮がちに取る。

「母上、エマルジョン男爵令嬢、我々は失礼いたしますね」

ハロルドはローゼリアを部屋の出口まで丁寧に誘導した。

この時、王妃が温かい目を向けていたことに二人はまったく気づいていなかった。



王妃のお茶席から連れ出されたローゼリアは、城内の中庭にある四阿へ案内された。

そこではすでにお茶の準備ができており、二人の侍女と一人の護衛が空気のように控えている。

その状況にローゼリアは少しだけ戸惑いを見せた。

「あの……ハロルド殿下？」

「ただ釣書を眺めるだけではつまらないと思い、中庭に席を用意したが……余計な配慮だったかどうか」

「い、いえ。お気遣い、大変痛み入ります」

肯定の意味を込め、ローゼリアは全力で表情筋を使って笑みを浮かべる。

彼女の微笑みは『冷笑』と誤解されやすい。

気をつけてはいるが、うまく笑っているか時々不安になる。

だがハロルドは好意的なものとして解釈してくれたようで、同じように笑みを返してきた。

そして片手を上げ、控えている侍女に紅茶を淹れるように促す。

同じタイミングで、柱の陰に控えていた側近の青年が革のファイルを何冊かハロルドに手渡した。「今回紹介する候補者はこれまでと少々傾向が違うが、素晴らしい方ばかりだ。ひとまず一度ご確認いただきたい」

「ありがとうございます。それでは早速、拝見いたします」

ローゼリアがファイルの一つを開くと、そこには気品ある貴公子の姿絵が描かれていた。

二十代半ばくらいだろうかと推測しながら、釣書に目を通す。

しかし年齢の欄で目を止めた。

なんとそこには、自分より一回り以上も上の年齢が記載されていたからだ。

思わずハロルドへ視線を向けると、なんとバツの悪そうな表情が返ってくる。

「彼は身持ちもよく、領民から大変慕われている伯爵だ。領地も王都から近く、父からの信頼も厚い。だが、その、年齢が……あなたよりかなり上だ」

口ごもる彼の様子からローゼリアはある考えに至る。

「後妻……ということでしょうか？」

「いや、そういうわけではない。ただ、こちらの伯爵は……」

「ルーゼント伯爵のお噂は、当時幼かったわたくしでも存じております。確か、ご婚約者様が使用人と駆け落ちし、伯爵はその後独身を貫かれています、と」

その話で、ますますハロルドは氣まずそうに表情をこわばらせる。

「確かにその情報は事実だが、彼に落ち度はなかった。領地はここ数年黒字続きであるし、年上だ

からこそその包容力もあるので、あなたも安心して嫁げるかと……」

ハロルドにしては自信がなさそうな物言いだった。

違和感を覚えながらも、ローゼリアは彼をまつすぐに見つめて話を聞き続ける。

すると、ハロルドが観念したように大きく息を吐いた。

「本当に申し訳ない。実は今回の候補者は全て王家の……父の意向が強い有力貴族なのだ」

「陛下の、ご意向ですか」

表情こそ変化はないが、心なしか落胆したようなローゼリアの返答にハロルドは慌てる。

「た、確かに父の意向が入っているが断っていただいて構わない！　そもそも今回の候補者は、

私はまったく乗り気ではなかった！」

必死で弁明をはじめた彼の勢いにローゼリアは目を瞬かせた。

「だが断られる前提で構わないので、打診だけでもしてほしいと父に押し切られてしまつて……」

彼の嘆きようを見るに、国王から強引に頼まれたのだろう。

そしてその国王もまた、誰かに頼まれた可能性が高い。

「もしや今回の候補者は、わたくしとの婚約を望んでいらつしやる方、ということでしょうか？」

ハロルドがグツと声を詰まらせた。

一回りも年上と知って面食らつたが、その実彼らは領地管理に熟を入れすぎて婚期を逃した、国王の信頼が厚い貴族ばかりなのだ。

能力だけでなく、容姿においても社交界は美丈夫と囁かれている。

年齢差を気にしなければ、密かに狙っている若い令嬢も多いだろう。

反面、彼らを『婚期を逃した貴族』と陰口を叩く者も少なからず存在する。

いくら評価のある有力貴族とはいえ、そのような悪評のある相手を国王が率先して勧めてくとは思えない。

そう考えると、今回の候補者たちは自らローゼリアとの縁談を希望したと考えるのが自然だ。

だが国王を通してまで自分を伴侶に望む声があるとは思っておらず、ローゼリアもさすがに驚いていた。

「わたくしのような未熟な人間が、こんな立派な男性方に望まれることは、とても恵まれた状況なのでしょうね……」

その瞬間、ハロルドが椅子を倒しそうな勢いで立ち上がった。

「そうにご自分を卑下するべきではない！ 彼らに伴侶として望まれているということは、あなた自身も十分に立派な令嬢ということではないか！」

急に感情的になったハロルドを見上げて、ローゼリアは目を見開いた。

「失礼……。あなたがあまりにもおかしいことを言うので、つい大きな声を出してしまった」

ハロルドはコホンと咳払いをしながら、再び席につく。

だが彼の言い分にローゼリアは首をかしげた。

「ですが、わたくしは婚約者でありながら、フィオルド殿下を支えるどころか追いつめてしまっていたのですよ」

「あれはあなたではなく、愚弟のほうに問題があった！ 世間もそれがわかっていているからこそ、あなたを伴侶に望む声が後を絶たな——」

そこまで言いかけて、ハロルドは急に口を閉ざす。

「後を絶たない？ 一体どういうことでしょうか？」

その質問を受けて彼はガクリと肩を落とした。

「あなたは愚弟が起こした騒動によって、ご自身の評価が落ちたと感じているようだが……実際は逆だ。弟との婚約が解消されて以来、あなたとの婚約を望む声が私と父のもとに多く寄せられている」

ローゼリアが、珍しく眉間に皺を寄せる。

「どういうことでしょうか？ わたくしのように愛想のない者に、それほど需要があるとは思えないのですが」

心底わからないという様子で考え込むローゼリアを見て、ハロルドは溜め息をついた。

「あなたは、とても自己評価が低いのだな……」

「そういうことではございません。実際に、わたくしに好感を持つ方があまりいらっしやらないのは事実ですから」

ハロルドは嘆くように片手で両目を覆う。

「ローゼリア嬢……。あなたはもう少し、ご自身の評価を自覚されたほうがいい」

「そう言われましても。わたくしはよく『生気のない人形人形のようだ』と囁ささやかれていますので、よい印

象をお持ちの方は少ないでしょう」

「確かにあなたの容姿に近寄りたいたいものを感じる者はいるだろうが……。留学から帰った私が耳にしたのは、あなたが周囲から『氷の青薔薇姫』と呼ばれている、という話だった」

もはや呆れ気味なハロルドが口にした言葉に驚き、ローゼリアは大きく目を見開く。

「氷の青薔薇姫!? わ、わたくしは陰でそのように呼ばれているのですか!」

「まさか、ご存じなかったのか!」

初耳だというローゼリアの反応に対し、今度はハロルドが驚きの声を上げた。

ローゼリアは、うつすらと頬を赤らめてコクリと頷く。

厳しい王族教育で忙殺されてきた彼女には、自身の評価を正確に把握する余裕などなかったのだ。直に接する機会の多い同世代の令嬢からの評価なら感じ取ることができても、社交界全体から向けられる自身の評価までは、理解していなかった。

だが、実際は本人の認識以上に周囲は彼女を高く評価していた。

周囲の目に対してあまりにも無頓着だった自分を恥じて、ローゼリアはそつとうつむく。

するとハロルドが苦笑を浮かべながら、慈しむような眼差しを向けた。

「どうやらあなたは、意外と箱入り令嬢のようだな。ならば、ますます私のほうで婚約者候補を選べるのがよさそうだ」

「えっ?」

「ここまでご自身の魅力を自覚されていないとなると、変な輩に引っかけかりそうで危うい。もちろ

んそのような輩は、お父上と兄君が追い払うとは思うが……」

そこで一度言葉を切ったハロルドは、ねぎらうように笑みを浮かべる。

「あなたの場合、家柄だけでなく容姿や内面でも男性を惹きつける。だが立場の強い相手に懸想されて強引に婚約を迫られたら、断ることは難しいだろう。このまま王族である私が、あなたの婚約者選びに関与していたほうが得策だ」

そう言つて、ハロルドは目の前にある紅茶を口に含んだ。

相変わらずの美しい所作に見惚れそうになったローゼリアだが、今の言葉で自分がかかなり氣遣われていることに思い至り、慌てて礼を口にした。

「帰国したばかりだというのに、殿下のお手を煩わせてしまい申し訳ございません」

「氣にされることはない。私が勝手にあなたの力になりたいと思っただけだ」

そう言つと、ハロルドはテーブル上に並べられたファイルを手早くまとめはじめる。

「あの、ハロルド殿下?」

「すまないが、今回の紹介はなかったことにしていただきたい。もちろん、この中に氣になる相手がいれば話は別だが……。今回は全て父の意向が強い。償いと言っておきながら、王家にとつて都合のよい相手を再び勧めるわけにはいかない」

ハロルドは釣書の入ったファイルを片づけるよう側近の青年に促した。

その様子を茫然と眺めていたローゼリアだが、今の流れで本日登城した目的がなくなつたことに氣がついた。